



#### 拠点集落の社会問題② 一縄文時代の食糧事情一

最近の研究では、水田耕作を特徴とする弥生時代の人々よりも、狩猟採集を食料獲得の基盤とする縄文時代の人々の方が同じ場所に長期間居住し続けることができたと言われています。「狩猟採集」というどちらかと言えば不安定なイメージのある縄文社会の人々が、なぜ持続可能な社会を実現することができたのか。

今回の展示では、拠点集落の食糧事情を支えた「海産資源」と「森林資源」について、貝塚から出土した貝殻や魚の骨、イノシシやシカなどの鳥獣骨やこれらの動物の狩猟に用いた石鏃、ドングリなどの堅果類を加工した道具である石皿や磨石類、根茎類（イモ類）の採集具である打製石斧などを紹介し、「食糧資源の効率的な利用と資源保護」という観点から「縄文時代の循環型社会」について考えています。

第4回の「見どころ解説」では、食料資源のなかでも、東京湾東岸地域の拠点集落を象徴する巨大貝塚、これを構成する「貝類（貝殻）」に焦点を当てて、「資源の利用と保護」について考えていきたいと思えます。

#### 貝殻から見る資源の利用と保護

展示では、貝塚から出土した貝類を「標準貝類相」と呼ばれる資料で紹介しています。標準貝類相とは、“貝塚の一定量中に含まれる貝類の量（個体数）と大きさのばらつきを数値で示したもの”で、今回は貝塚1ℓあたりに含まれていた貝類を、実際に遺跡から出土した資料を用いて展示しました。ここで着目したい“見どころ”は、貝類の“種類、量、大きさ”の3つのポイントです。

**貝の種類** 千葉県有吉北貝塚で出土した食用貝の種類は、主にイボキサゴ・ハマグリ・シオフキ・アサリの4種類からなり、いずれも集落から日常的に行き来できる東京湾の河口干潟で普通に採ることが出来ます。一方、有吉北貝塚と同じ時代に形成された大網白里市・東金市養安寺遺跡の標準貝類相では、チョウセンハマグリ・ダンバイキサゴ・フジノハナガイが主な食用貝となっています。一見すると、どちらの集落の貝類も同じように見えますが、東京湾の河口干潟で採れる有吉北貝塚の貝類とは異なり、養安寺遺跡で出土するこれらの貝類はいずれも九十九里浜に特徴的に多産する外洋性の貝類です。このことから、同じ時代・同じ房総半島に位置する貝塚であっても出土する貝類には地域性があり、縄文人がそれぞれの集落周辺の環境資源を適切に把握し、効率的に利用していたことがうかがえます。

**貝の量** 有吉北貝塚の食用貝の中で圧倒的な量を誇るのは、全体の88%を占めるイボキサゴです。小さな巻貝であるイボキサゴは、味は良いものの肉量がごく少ないため、現在は食用とされることはなく、江戸時代から戦前にかけては水田の肥料として利用されることもあったほどです。それにもかかわらず、縄文人がイボキサゴを食用として好んで利用した理由のひとつは、“足が浸かる程度の浅瀬で、簡単に、しかも大量



写真1 標準貝類相(千葉県有吉北貝塚)



写真2 イボキサゴ採集の様子

に採集できる”という資源としての特性にあったと考えられます。また、個体数では全体の9%とイボキサゴにはるかに及ばないハマグリですが、標準貝類相で比べてみると大量のイボキサゴにも負けないくらいのボリュームがあります。こういったことも文字や数値だけでは気づきにくい、展示ならではの“見どころ”として観察してみてください。

**貝の大きさ（資源保護）** とはいえ、出土したハマグリ 1つ1つの平均的な大きさは31.5 mm、年齢でいうと1歳から1.5歳くらいの若い個体が中心で小さく粒ぞろいなのが特徴でもあります。ハマグリというと、現代でいうところの「焼き蛤」に使われるような大ぶりのものを想像してしまいがちですが、有吉北貝塚のものはそれとは比べものにならないくらい小さい印象を受けることでしょう。おそらくは、日常的に漁が行なわれていた（やや“採り過ぎ”の傾向にあった）証拠でもあり、特に貝塚の形成が活発な時期には、貝類の小型化（＝資源量の減少）が深刻化していた様子をハマグリをはじめとした二枚貝の大きさから垣間見ることができます。

図1は二枚貝の平均的な大きさの変化を時期別（中期中葉～後期初頭）に比較したものです。阿玉台・中峠式期から加曽利 E I 式期に向けて次第に小型化していくようが見てとれます。この頃は貝塚の形成がもっとも活発化していた時期でもあり、二枚貝の小型化は「さいしゅうあつ採集圧」と呼ばれる現象を示しています。「採集圧」とは、資源量に比べて採集される割合が高くなると起きる現象で、“採り過ぎ”による資源量の減少が深刻化していたようです。ところが、次の加曽利 E II 式期になると、二枚貝の大きさが再び回復していくようが見てとれます。この時期も貝塚の形成が活発なことに変わりはありませんので、資源量が回復する何かしらのきっかけがあったことが想定されます。“自然条件に恵まれた”などの自然要因の可能性もないわけではありませんが、きっかけのひとつはおそらく、“縄文人による資源保護が行なわれた”ことだと考えています。図2は、時期別のハマグリの大きさのばらつきを示したものです。ここでは、加曽利 E I 式期と加曽利 E II 式期のグラフを比べてみてください。いずれも30 mm～35 mmをピークとする単峰型で、一見すると大きな変化はないようにも見えますが、20 mm以下の幼貝にわずかな違いが認められます。具体的には、加曽利 E I 式期には採集されていた20 mm以下の幼貝が、加曽利 E II 式期になるとほとんど採集されなくなっていることがこのグラフから読み取れます。このことは、“ここまで採集してしまうと資源の枯渇を招きかねない”ほど小さい幼貝は意識的に海に戻すようにしていたことを示唆しており、資源保護（管理）を意識した循環型社会の一端を、貝殻から読み取ることができた好例であると言えるでしょう。

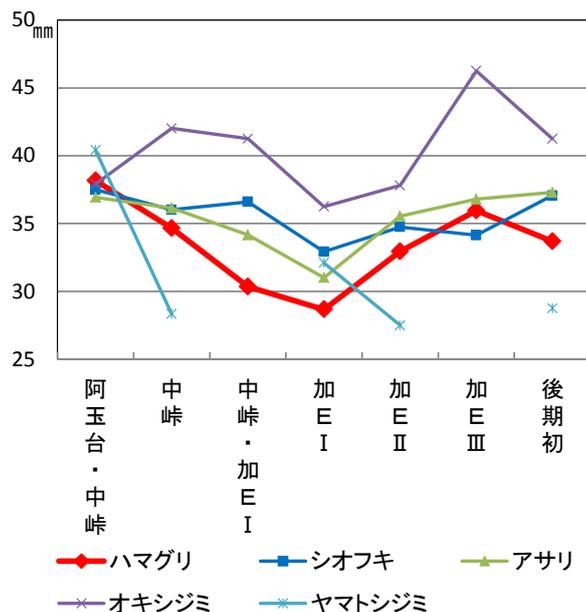


図1 二枚貝の大きさの変化（平均値）

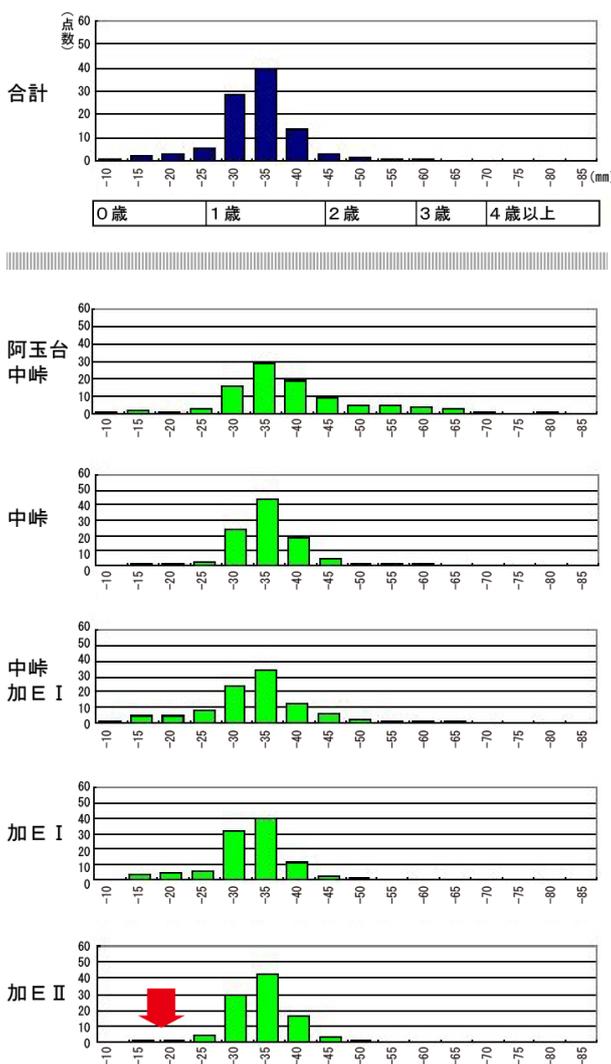


図2 ハマグリの大きさの変化